

北のみち普請ワークショップ開催 〈鹿追町・帯広市〉

平成16年10月18日(月)・19日(火)の両日、鹿追町と帯広市において、「北のみち普請」ワークショップが行われました。まちづくりのさまざまな取り組みが高く評価されている鹿追町では今後の活動の目標などについて、帯広市ではリーダーと後継者の育成について意見交換が行われました。

■ワークショップin鹿追



鹿追町は美しいまちづくり、美しい地域づくりに関する活動を全国に先駆けて積極的に取り組んでいるまちです。今後さらに高いリーダーになってもらい、さらに充実した展開をしていくためには「自然との共生」「環境との共生」「地域との共生」という3つの共生というのがあります。これを広い意味で具体化できる最短距離にいるのが鹿追町です。そこで今後のまちづくりの目標にして頂くために、アイルランドのタイディタウン運動の取り組みについて紹介されました。

この運動は1958年から自分たちがプライドの持てるまちにしようということで始められ、最初は花を植えるところから始まり、次に環境に配慮するようになり、家並みも整えるようになりました。46年間活動が続けられてきたことで、まちに人が来るようになりました。地域のレストランに人が入るようになり、地域が潤うようになった。大きなまちに仕事に行っていた子供たちが戻って来て、自分たちのまちで仕事をするようになった。さらには5年前前からIT産業がアイルランドに集中しました。まちが美しくなったことで、まちの豊かさ、生活の豊かさ、経済的な豊かさもずいぶん向上したのです。また、この運動は昨年のベストワンにも表彰され、活動内容が国営テレビでも紹介され、賞金も贈られました。賞金は今後の活動資金にしていくのですが、こんな風に活動を支えていって、まちの人、子供たち、外から来る人や応援団も交えながらまちを良くして行くというのがタイディタウン運動なのです。

このタイディタウン運動に鹿追町の活動もつながっているように思います。今後はまちづくりコンテストの開催など、活動そのものを支援していく体制を徐々につくっていくことが必要ではないか。それには小さくても資金を出してくれる企業を住民と行政が育てて行くことが必要ではないか。地元で民間の環境に関わっている企業がお金を出して、自分たちも活動に参加しながら支援していき、最終的には自分たちのところにお金が入って来るような仕組みをつくっていくことが必要ではないかという意見が出されました。

このほかに参加者の活動内容を通して、住民全体の合意形成や民間と行政の協働はどうなっているかなどについても議論がなされました。

■ワークショップin帯広



翌日、場所を帯広に移して「ワークショップin帯広」が開催されました。帯広では「若者のボランティアに対する意識構造を啓発する」「町内会の高齢化、次世代につながらない」などの課題が出されたことから、後継者とリーダーの育成に重点をおいて討論が行われました。

後継者の育成については、一番早く社会に出て行く人材でもあり、また多感な時期を過ごしている高校生の感性を活動に引き込めないだろうかという意見が出されました。高校生が出てこないことと少子高齢化社会の中で後継者が出てこないということにもなるわけですが、ただ高校生を動かすにはお金や表彰状じゃない、要はどうやって褒めたらいいのか、やった達成感をどうやったら味わえるのかということが重要になってきます。

そこで帯広では3年前から「ふるさと花コンクール」というイベントに高校生にも参加してもらっています。実行委員の人間が農業高校に行きアドバイスしながら、花づくりを行っているのです。1年目は子供たちも慣れずに大変でしたが、2年目からは大人では考えもつかないようなことを考えて作品に生かしてくれるようになりました。展示期間中には子供はもちろん親たちも見に来てくれて、その達成感というか、自分たちにとってのやりがいとか、社会との関わりが楽しみになってきているような彼らの姿からも、子供たちにそういう場を与えることが大切ではないでしょうか。

このように子供達を巻き込んで活動していくことが、自ずから後継者を育てることになっていくのではないのでしょうか。社会活動、青年活動にできるだけ多くの子供たちに参加してもらうことは、子供の成長にすごくいい影響を及ぼしているんだという自覚を我々大人が持ち、いかにいいお手本を子供たちに示せるかというところが、これからの地域の重要な考え方になるのではないだろうかという意見が出されました。

もう一つの課題であるリーダーの育成については、たとえば次にバトンタッチした場合、どうしても次にやる人のことを見ていられないで思わず口も手も出してしまうというケースが多いようですが、それで後継者が育たないということもあります。やはり初代リーダーには心を大きく我慢して見守ることも必要なのではという意見が出されるなど、活発な意見交換が行われました。